

ボーヴォワール『戦中日記』について

西 陽 子

一九九〇年、ボーヴォワールの養女、シルヴィー・ル・ボン・ド・ボーヴォワールによって、『サルトル宛書簡集』と『戦中日記』⁽¹⁾が出版された。本稿ではこの『戦中日記』をとり上げ、それがきわめて個人的でありながら、「私的な日記」あるいは「内面の日記」とは一線を画し、さらに日記に対する不信が、作品そして文学にかける信頼と表裏であることを論じようと思う。

『サルトル宛書簡集』には一九三〇年から六三年にわたる三二一通の手紙がおさめられている。その大半が三九年九月の大戦勃発時から、サルトルがパリへ帰還する四一年三月半ばにかけてのもので、ほとんど『戦中日記』と重複する。一方、ボーヴォワールは小説、論文、エッセーなどに自身の体験を多く取り入れたのみならず、大部の自伝を残している。日記、そして書簡はその資料として、また時にはその一部分として用いられている。そこで、これらを参考にしながら論を進めていく。

『戦中日記』は、一九三九年九月一日に始まる七冊の手帖をまとめたものである。⁽²⁾ VとVIの間にほぼ四ヵ月、VIとVIIの間に約二ヵ月の空白がある。またVIでは、四〇年六月一三日から二七日の二週間がぬけている。VIIは日付の連続しない記述が七回(初めの三回はサルトルへの呼びかけ、残りの四回は思索の覚え書)と、サルトルがドイツの捕虜収容所から送ってきた手紙を書き写したものの、「私の小説について」、「小説について」と題された断章、その他講義ノート、読書リスト、チェスの星取表などからなっている。この最後のメモ類は編者が削除しているので、くわしい内容も書かれた時期もわからない。小説に関する断章にも日付がないが、「私の小説」というのは三八年から書き続けている「招かれた女」⁽³⁾を指し、『女ざかり』に、「一九四一年夏に『招かれた女』を終えた」、「私は春、夏を満喫した。私の小説は終りに近づいていた。次の本についてノートをとっていた」⁽⁴⁾とあり、さらに別の箇処で「頭の中で『他人の血』の主題を練り始めた頃」のメモとして、この断章が少し手を加えて引用されている。⁽⁵⁾従って、VIIは四一年夏頃までは使われていたと考えられる。VIIを除いて、内容の基本は生活日誌で、朝起きてからの一日の行動、見聞がその時刻に至るまで記録されている。決まった時間帯につけることはせず、ホテルの自分の部屋、カフェ、学校の休憩室などで暇を見つけて書くようにしている。旅先にも持って行っている。I、VIの初めは毎日、それも日に何度となくページを開いているが、中断する頃にはまとめ書きが目立ってくる。

同じ期間サルトルへの手紙もまた、一緒にいる間を除いてほぼ毎日書かれている。四一年三月まで『サルトル宛書簡集』で目につく空白は、四〇年三月二四日から七月一〇日、七月三〇日から一〇月一六日のみである。この中には、ナチス・ドイツとの休戦協定調印(六月二二日)後と、九月にサルトルがドイツの捕虜収容所へ

移送されたあとに、消息不明で手紙の送りようもなかった期間が含まれる。七月一日の手紙は「あなたの短い便りが届いて、ひどく動揺しています。（……）せいぜい印刷された通知がくるぐらいだろうと思つていました」と、一〇月一七日の手紙は「あなたからの連絡なしにこの二カ月をすごすのは、なんとつらかつたことか。手紙の宛先もわからないなんて」と始まつている。しかし、サルトルの側の書簡集を見ると、六月九日までと八月一二日付にポーヴォワールの便りを受け取つたことが書かれて⁽¹⁾いるから、その他にも紛失した分がかなりあると思われる。一〇月中旬以降は、規定の用紙を使えば文通が可能となる。だが検閲を受ける上に返事がなかなか届かず、時には手紙は一切受け付けられなくなったという噂が流れるなど思うに任せぬ状態が続き、何度か中断と再開がくり返される。日記（Ⅶ）のサルトルに呼びかける記述は、そうして便りが書けなかつた時に当たつてゐる。

このように約一年半の別離の間、日記と手紙が平行してゐるわけだが、特に一九四〇年二月までは両者はほとんど完全に重複する。日記が朝起きた時点から、手紙が、前日、便りを終えた時点から始まるという違い、手紙には「女友達」をめぐる打ち合せ、金銭上の報告、相談などの実務的な必要事項、サルトルが面白がりそうな噂話がくわしいという違いはあつても、内容に大きな差は見られず、どちらも生活の様子が順を追つて細かく記されている。加えて、三九年九月七日付のサルトル宛の第一通目に「やすやすと日記をつけています。もうずい分厚くなりました。全部読んでもらいますからね」と書いて実際そうしているから、日記を二重の手紙として読むこともできるし、今まで述べたように、手紙は日記よりも長期間にわたつて規則正しく書かれてゐるから、こちらを日記以上に忠実な日誌として読むこともできる。

手紙は言うまでもなく、日記のきつかけも戦争である。しかし、戦局や政治、外交の動きに関する言及はほとんど見られない。時折ニュースが数行、大した感想もつけずに記されるだけである。比較的長く書いているアドミラル・グラーフ・シュペー号自沈事件（三九年一月一八日）も、事件よりパリの人々の反応に注目している。宣戦布告から約半年間、西部戦線で実戦らしい実戦がなかったことを考慮に入れても、ボエヴォワールの視野はせまく、社会については自分の生活の範囲を、戦争についてはサルトル、ボストに關係する範囲をこえない。自らの責任を考えることはさらに少なく、三九年一〇月八日のサルトル宛の手紙では「私たちは事態を手をこまねいて見ていた世代に属します」と言いながら、続いて「政治において動くことを拒む私たちの態度は全く適切だと思えます」と書いている。また、同じ頃『招かれた女』の設定を三八年から三九年に決めているが、それは、フランソワーズとグザヴィエールの間の緊張が殺人を惹き起こすまでに高まる原因としてピエールの出征が最も都合だったからにすぎず、物語は時代とそれ以上の関わりを持たない。そして、ドイツ軍がいよいよ総攻撃を開始し、瞬く間にフランス国内に侵入してきた四〇年春から初夏にかけての日記は完全な沈黙、再び記録を始めるのは、ボエヴォワール自身の生活が急変した六月九日のパリ脱出からである。ようやくこの頃、歴史を我が事として捉え、責任や他の人々との連帯を意識した言葉が見られるようになる。だがこの開眼も否応なしにであつて、自ら求めた結果ではない。『戦中日記』を書くボエヴォワールの態度は、戦後の活動とは対照的に個人主義で受け身である。

知られるようにサルトルとボエヴォワールは、お互いに嘘をつかないだけでなく、何一つ隠さず、すべてを言うという取り決めを結んでいた。これによつて得た利益を、ボエヴォワールは『女ざかり』で次のように述

べている。

私はもう自分を心配する必要がないのだ。確かに好意的ではあるが、私よりも公平なまなざしに、私の反応のいちいちが映し出され、私はそれを客観的なものとして受け取る。そうやって監督されるおかげで、孤独の中ではたやすく実を結ぶ恐怖、いつわりの希望、いたずらな不安、幻想、ちよつとした錯乱に陥らずにすむのだった。⁽⁸⁾

サルトル（そしてポスト）を兵隊にとられたパリで、ポーヴォワールはこの不健康な孤独に直面する。頻繁に外出しているとは言つても、交際する相手はほとんど年下の同性に限られている。彼らは精神的にも経済的にもポーヴォワールに依存しながら、一方で、ワング、ヴェドリーヌがサルトルをめぐつて、オルガがポストをめぐつてポーヴォワールと、さらにはソロキーヌがポーヴォワールをめぐつてヴェドリーヌと三角関係をつくっている。⁽⁹⁾ 付き合いの主導権はポーヴォワールにあつたはずだが、むしろ、この入り組んだ小社会の毒に一番当たつたのはポーヴォワールらしい。ページの多くがこれらの「かわいい寄生虫」に割かれ、しかも彼らに対する怒りを語る時の容赦のなさ、一方的なこじつけ、嫉妬を語る時の迷走ぶり、齒切れの悪さに余裕は見られない。

そうした嵐の記述は、多くの場合核心にふれないまま切り上げられる。たとえばオルガ宛のポストの手紙を盗み読みして「完全に打ちのめされる」（三九年一〇月二九日）。すると、

サルトルがここにおいて、ジュアン・レ・パンでのようにさとしてくれたらよいのに。そう考えるだけで、涙がにじむ（うまいことすりかえている、これで、はつきりした悲しさにかわり、心おきなく流されることができる——さっきの悲しさはいかがわしくて、ありがたくなかった）——以上、終り。洗いざらい書いて、少し落ち着く。（……）何もかもくすんで、もはやどこにも苦痛の種はない。そして突然しつかりと我に返る、私にはサルトルがいる、

としめくくって改行、オルガと晩から外出した話に移る。

日記にしる手紙にしる、毎日「正確に」生活の記録を続けようとするれば「表面的」になることを免れない⁽¹⁰⁾。それでなくても学校、小説執筆、外出、人付き合いに忙しい毎日である。疲労や睡魔、時間に大きく制限される。同じ内容を二度ずつ（ポストにも似たような便りを送っていたとすると三度ずつ）くり返すことが、推敲にかわる可能性はある。概して日記よりも手紙の方が整理されて読みやすい。だが、それで内容が発展する可言えれば、かえってサルトルへの想いに「すりかえ」られる傾向が強まる。先の場合も、日記と同じように「べたべたした一刻」を語り、ジュアン・レ・パンでの思い出を頻り述べたあとに「やさしいあなた、あなたが私にとって何であるか、充分に言い尽すことは決してできないでしょう」と始まって、ポストの件は棚上げになる。加えて手紙では、「会った時に話します」という便利な逃げ口上が通用する。

日記を始めて約二ヵ月後、サルトルに見せたところ、もつと発展させるように勧められたポーヴォワールは、意識して自分に目を向け始める。「女性性」に注目している箇処（二月三日）は一〇年後の『第二の性』⁽¹¹⁾を、

自分の地金として「フランス人、田舎者、中流の、しかも階級から脱落したブルジョワ」を挙げてゐる箇処(二月九日)は自伝を予想させて興味深い。しかし、三九年の時点ではいずれも「研究すべきだろう」と言うにとどまつてゐる。自分に強い関心を持ちながら、同時に、それよりも活動的な生活を続けるべきだと抑制する力も強い。また、容姿についてアンケートをして歩き、好意的な意見を書き連ねている様子からは、照れもうかがわれる。

先の取り決めの発端には、サルトルの「仲間たち」に共通する沈黙、内省に対する不信があった。彼らは「内面生活」を、欺瞞と自己陶醉がひそかに養われる「悪臭ただよう沼地」と考え、何であれ隠さず口に出す習慣だった。一〇年後もこの不信感は根強く、ボーヴォワールは「プーペットやヴェドリーヌ」のタイプ、好んで「ロヨラ流の瞑想」⁽¹³⁾に閉じ込める人々に対して強い軽蔑と嫌悪感を示す。だが、ボーヴォワールも常に地に足がついていたわけではない。「女ざかり」に、マルセイユで教壇に立っていた頃、キャサリン・マンズフィールドを読んで憧れていた「女一人」という役になりきって、自己満足にひたっていた様子が書かれている。⁽¹⁴⁾一九三五年から三七年にかけての習作『青春の挫折』⁽¹⁵⁾には、そうした思い出が投影されたシャンタル・プラターという女性が登場する。

シャンタルに与えた短所が気になって仕方がなかったのは、シモーヌ・ラブルダンの中にそれらを見つけたからよりも、私自身が陥った経験があるからだ。二、三年の間、私は一度ならず人生を偽装して美しく見せたいという誘惑に負けたことがあった。⁽¹⁶⁾

シモーヌ・ラプールドンというのはルーアン時代の同僚教師で、『女ざかり』によると、ポーヴォワールの友人でもあるマルコという青年に夢中だったが、相手にされなればかりか悪意に満ちた仕打ちをくり返し受けるので、せめて空想で彼を見返そうと必死で「現実を偽装し、経験を誇張していた」⁽¹⁷⁾。シャンタルも「経験をいちいち美化し、奇跡の幻を追ひ求め、きらめく感受性を備えた、自由な女性という偽りの自己像をつくり上げる」⁽¹⁸⁾ことよって、田舎町の教師に任官された不満と、パリにいる友人たちに対する妬みをごまかしている。彼女は、お気に入りの方生徒まで悲恋の主人公に仕立て、その生徒の破滅に手を貸す結果になる。ところが事実を見抜けなかつた幼稚さ、保身を第一に考えた卑怯さを自覚しようとは決してしない。物語の最後、終業式に出席し、生徒や父兄に囲まれて感謝の言葉を聞くうちに、彼らの目の中に自分の「ほつそり」として「少々謎めき、矛盾を秘めたシルエツト、地方の古びたりせに突然現れて皆を驚かせ、目をくらませた」⁽¹⁹⁾シルエツトを見つけて満足し、初めからの望みどおり、晴れてパリに近いシャルトルへ転任して行く。

もともと反りが合わない上、ルーアンの生活に退屈していたポーヴォワールは、ラプールドンを格好の餌食にして大分鬱屈を晴らしたらしい。興味深いのは、マルコが盗んできたラプールドンの日記を読んで、二人で嘲笑つたという挿話である。⁽²⁰⁾ シャンタルの物語は次のような書き出しに始まって、大半が彼女の日記の記述で進行する。

10月2日

さつきリセを出てから、プラム色のこの手帖を買った。やわらかな革の表紙は、私の大好きなフラ・アンジェリコの『受胎告知』の紫の色合をそっくり思い出させる。この手帖のページの汚れない白を変質させるのは冒瀆にも等しいから、新品のノートに習字の第一ページを始める子供の熱心さで、一字一字書きこんでいる。⁽²¹⁾

ラブルダンをシャンタルにふくらませるについて、ポーヴォワールは日記を重要な鍵として用いているのである。

ポーヴォワールが『戦中日記』の外形について述べているのは、サルトルへの便りに「あなたの手帖に似た立派な手帖を買いました」(四〇年一月二五日)、「買ったばかりの分厚い手帖に書き始めました」(七月一日)と見られる程度である。また、先に述べたように、VIIには授業のためのメモ、チェスの星取表などが含まれていたそうだし、それ以前にも収支計算や買物リストにページを割いている。雑多な用事に用いて、少なくとも神聖視はしていない。しかし、サルトル、ポストとの話し合いを続け、「現実的なつながり」を保つには文通だけで充分である。手紙が紛失した場合の控え以外に日記の実際的な用途はない。それにも拘らず偏執的に書き続けることに、戦時下でも「投げやりにならない女」⁽²²⁾の演技、そしてシャンタルに通じる自己欺瞞がないとは言えない。初めの頃に断続的にくり返される不安、恐怖を訴える記述は、すでに書きながら自分をおおっていることを思わせる。B・ディディエは、いわゆる「私的日記」の作者たちの過剰な自己中心主義、優柔不断、幼児性、ブルジョワ精神などを指摘し、さらに、日記がそうした傾向を助長しているのではないかと疑問を投

げかけている。「私、私」と言い立てる「恋に狂った頭でつかちな女たちのイメーシ」が振り払えず、「そっくりになるまいと」「一種謙遜して《吐き気がする》と思う方を選」ぶ、ところが「自分から謙遜したことで優越感を覚えるのだから、この謙遜も本物ではない」と『戦中日記』にある（三九年一月三日）。「暇、内省、孤独」は自分を「発見し探り当てる」ことを可能にするとしても、必要以上に「私」を肥大させる危険を伴う。しかも誠実さを決定する尺度はどこにもない。日記はいつでも簡単に「悪臭ただよう沼地」と化するのである。

一九三九年九月二日に召集されたサルトルは、まもなく「手帖」をつけ始める。サルトルにはこの日記の出版の思惑も、またその当てもあつたらしい。そこで彼は、一兵卒の戦争体験の記録、哲学的思索、過去の自分の総括、現在の自分の探究とあわせて、ダビ、グリーン、ジッド、スタンダール、ルナールなどの『日記』を研究して⁽²⁶⁾いた。ポーヴォワールもそれに付き合う形で時折感想を述べている。しかしサルトルの日記を除いては、どれにもさしたる興味を示していない。ジッドは選択眼が見事で、特に第一次世界大戦当時の時代描写に見るべきものが多いものの、終わりの頃には「ぼけて」しまっているし、⁽²⁷⁾ダビは「雰囲気を感じさせる術は知っている」が「信じられないほどまぬけ」⁽²⁸⁾、ジュリアン・グリーンは「上辺ばかり」な上に「感受性のかけらもなく」語り口も下手⁽²⁹⁾、といった調子で酷評している。自分の日記についても評価は同程度で、安直さ（小説の場合は文章が浮んでくるのを待たなくてはなりません。でも手紙や日記の場合は、いつも手が考えに追いつかないのです）『書簡』、三九年一月二四日）、断片性（初めの頃の手帖を読み返してみても、ある一日をその日だけのこととして語ると、いかに意味を歪めるかがわかった）『日記』、一月二八日）、不正確さ（一番ひつかかっていることの一つ、つまりポストがオルガに私宛よりも長い手紙を書いている、ということ

を手帖にも書かなかつたし、サルトルにも言っていないことに気付く」（『日記』、一月三日）、惰性（もう日記はつけなと思います。（……）近頃では偏執からつけていただけで、興味がなくなりました」（『書簡』、四〇年三月三日）を指摘している。

「日記」は失敗作の同義語ともなる。『女ざかり』では、

プレリアンヌ夫人を取りまく芸術家の世界は夫人自身と同じくらい不自然だった（……）私は三人以上の登場人物を同時に操るだけの技量がなかつた（……）自分の話ばかりして「日記」のジャンルに陥りたくなかつた。残念ながらそこから脱け出せず、すぐに紋切型を並べる結果になつた。⁽³⁰⁾

と、マルセイユ時代の習作を振り返っているし、『他人の血』ではドニーズの処女作を次のようにプロマールに批評させている。

「説明が多すぎる」とジャン（・プロマール）は言った、「何も描いていない。言うべきことがあつても、どう言うか到大して気をつかつていない。小説というより、日記の抜粋みたいだ」

「でもサビーヌは描けているでしょう、エロワだつて……」

「彼らについてのあなたの考えを言っているだけだ、描いてはいない。登場人物はひどく抽象的だ。それに物語を組み立てようとしていないし」⁽³¹⁾

小説が語るに価する主題を持ち、堅固な構造と独創的な表現に支えられ、手ごたえのある世界の中で血の通った登場人物が自分の声を発するのに対し、日記は、形もなさず、信用もおけず、ぞんざいでありきたりの独白というわけである。この序列は、自然日記を書くボーヴォワールの態度にも影響を及ぼす。

『戦中日記』には、非日常的な事件（墮胎、乱痴気パーティー、友人の逮捕、恋愛冒險談）と同じ熱心さで、小耳にはさんだ会話、人々のふとした振舞、食事の内容、芝居の値段などが拾い上げられている。思いの外、天候の記述も多い。しかもメモ、箇条書ではない。三九年九月五日の日記に「毎日、朝から晩へなんとゆつくりと陰鬱になっていくこと——ゆつくりと、あまりにゆつくりと。これこそを描写すべきだろう」とあるように、風景、人物を描写しながら、順を追って前後関係を省略せずに語ることを心がけている。三八年に書き始め、一時休んでいた『招かれた女』を再開するのは三九年一〇月中旬、物語を三八年から三九年に設定しようと思いつくのも同じ頃である。従って九月の時点では、そうしたところで当面何に使うという当てはない。また、書いたものがすぐ役に立つと考えるほど無邪気ではないだろう。だが欲がないわけではない。三九年七月、兵役についているポストを訪ねてアミアンまで行ったものの、行き違いが重なってろくに話もできないということがあった。その翌日のサルトル宛の手紙にボーヴォワールは、「今私はががつしているのです、昨日のようにどこから見ても面白くない一日であろうと、くやしいとは思いません。典型的な一日、小説にくらでも使える一日に思えるからです。それも、恋の方に進めてもよし、ありのまま、偶然性のままに残してもよし、使いはいろいろあると思います」（七月七日）と書いている。ボーヴォワールが「仕事」と言う時には、本業の教職ではなく小説執筆を指す。加えて『青春の挫折』以降は「自分が知っている事柄、知っている人々に限

つて書く。自分が個人的に学んだ真理を伝えるように努力する⁽³²⁾と決めている。そして結果として目論見は成功し、サルトルの出征（招かれた女）、四〇年六月の集団避難（他人の血）を始めとして戦時下のパリのたゞずまい、日常生活の細部が小説にとり入れられ、その厚みを増すのに一役買うことになる。

日記がさらに大きな働きをしているのは自伝である。小説の場合以上に資料として用いられていることは当然として、時にはままとまって日記のまま登場する。最も量が多いのは『女ざかり』の中の『戦中日記』⁽³³⁾、その他『或る戦後』で四六年四月から五月、五八年五月から一〇月にかけてが日記の形になっている。⁽³⁴⁾『別れの儀式』⁽³⁵⁾も加えてよいかもしれない。一九七〇年からサルトルが亡くなる八〇年四月までの日記をもとにして、かなり日付を重視した書き方がなされている。

「真実」をうたつていても、自伝は小説同様に作品であり、そこに日記の場所をもうけるのも技巧の一つである。その効果はいくつか考えられる。第一に日記の日付が句読点の役割を果たす。ポーヴォワールの自伝は冗舌な上に概して道標不足で、注意していいないと何年の話かすらわからないまま、次々と現れる話題に足をすくわれる。年月日が明示された日記の部分はその混乱を和らげる。第二に語りがそこで一度中断し、時間の進み方がかわる。日記は現在をくり返すばかりである。自伝執筆の時点（女ざかり）ならば一九六〇年）を目標して進んできた過去は細分され、停滞を強いられる。しかし「奇妙な戦争」の間のように見通しのきかない足踏み状態には、やはり見通しのきかない断片の積み重ねである日記の方がふさわしいだろう。第三に、仮りに不都合な内容があれば事前に削っておくわけだから完全には言えないが、読者は、自伝の語り手が正当化する以前の情報を手にする。自伝の「真実」は一層の「真実らしさ」を得る。最後に、自伝の本筋からはこぼれ

がちな日常生活の風景を無理なく示すことができる。大事件の羅列では、平凡な生活をおくる平凡な読者との距離は広がるばかりだろう。

『女ざかり』の日記の部分には、次のような断り書がついている。

そして、ある朝、来るべきものがきた。そこで、孤独と不安の中で私は日記をつけ始めた。日記の方が、それをもとに何を語るよりも生彩にとみ正確だろうと思う。だから以下にお見せする。何の役にも立たない細かい点、あまりに個人的な感想、繰り言の類を削るだけにする。⁽³⁶⁾

そして続くのは、原文を尊重しながらも大部分を削除し、無難なトピックスと、生活のあらましを伝えるのに必要なだけの情報をつないだパッチワークである。全体の分量（『女ざかり』は一九二九年から四四年までの一五年間を扱っているし、戦争に限って見てもまだ三年近く続く）、関係者に対する配慮（日記の大半が対人関係で、そのまた大半がいろいろな意味で公けにできない内容である）を考えれば、残るものは確かに少ない。だがこの断り書で表明されているのは、それ以上に、作品に仕上げた日記を見せるという意志である。たとえば四〇年六月二九日、ボ－ヴォワールは、二日ばかりで疎開先のラ・プエーズからパリへ戻り、一夜あけた翌三〇日の朝、日記を開く。『戦中日記』はまず、「この五日というもの、彼らが帰ってくる——帰ってこない、という確信の命じるままに生活の全部が動いている」と一番の胸のつかえから始め、次に「今私は《ドーム》の、テラスに近いいつもの場所にいる」と周囲の風景、現在の心境を述べて一度中断、間があいて今度は

《マイユ》に移り、もう一度朝に戻つて「今レモンジュースを飲んだところ」まで語り、二八日にパリを目指して出発した話に入る。二八日の夜まで進んで区切りがつくと再び中断、次の「今」は午後四時近く、場所は《ドーム》、周囲をしばらく観察し、本を読んでから二九日にかかる。パリ帰着までたどつて、最後に三〇日の暮方から寝るまでの行動を付け加える。この部分は翌七月一日に書いたものである。一方「女ざかり」は、二八、二九日の旅を三〇日から完全に独立させ、さらに、車に便乗させてくれたオランダ人一家の悪口、ドイツの軍服に対する興味、「今」目の前に見える光景との比較、関連して思い出した本の感想、といった合間の脱線を省いて、短い旅行記にまとめてある³⁷。基本の記述は同じであつても、二〇年後の価値感に従つて取捨選択を行ない、構成し直したこちらは、もはや日記ではなく、物語である。

先に、『戦中日記』を二重の手紙と見ることも、手紙を二重の日記と見ることも可能であると述べた。「私的な日記」の第一の条件は、読者、それも現実の読者を持たないことである。サルトル、そしてポストを、ポーヴォワールにとつて本当に他者と呼べるかは微妙である。その他の友人、家族と違つて全く悪口を書いていないのみならず、扱い方も異なる。たとえばポストに関しては「こまやかで情熱的な夜」で終るものが、ヴェドリヌに至つては「顔から発する胸を悪くする甘つたるいにおい」とまで書かれる。愛情の面でも記述の面でも格段の差別がある。手紙はもとより日記にも自己検閲が加えられている可能性は大いにある。だが、それでも二人の存在は日記をある程度公けなものにし、自己陶醉に陥る危険性を多少なりとも少なくする。また同時に、読者を得ることで日記は作品に、それを書くポーヴォワールは作家に近づく。先程例として挙げたパリ帰還、そしてその前のパリ脱出の際の日記は、強い好奇心と冷静な観察眼がショックに打ち克つて、独白とは対

照的なルポルタージュとなつてゐるし、過去と現在の交錯は、混乱を招くよりもポーヴォワールの感情の揺れを伝えて、生彩を加えている。しかし、ポーヴォワールは日記のそうした柔軟さよりも、物語の統一を優先する。そして、日記には、作品の「真実らしさ」を演出する補助としての地位を許すのみである。

一九八三年、ポーヴォワールは、一九二六年から六三年にかけての、主にポーヴォワール宛の手紙からなるサルトルの書簡集⁽³⁸⁾を出版した。読者の関心は当然それと対をなす彼女自身の書簡集出版に集まつた。ポーヴォワールはそれについて問われるたび、「紛失した」、「たとえ見つかつても、私が生きてゐる間は公表すべきではない」⁽³⁹⁾、「見るべき内容はない」、「私一人に関わるものだ」といった答え方をしていた。一方、『娘時代』以降、ポーヴォワールの執筆活動の中心は小説から自伝に移る。自伝を書き続けたのは、「いつか人々が感嘆し、好奇心に駆られながら私の伝記を読む」⁽⁴²⁾という一五歳の頃の願望、世間の誤解を解き、中傷に反撃する必要、始めたもののきりが無いという事態、そして、自分を誠実にさらけ出すならば人々の興味をひき、また役にも立つという信念からだつた。この態度と、書簡集の出版を拒むそれとは矛盾して見える。先にも述べたが、対人関係に差し障りが多いことはある。オルガはサルトルの書簡集の出版の際、自分宛の手紙を含めることを拒絶し、ポーヴォワールとは不仲のまま終つたそうである。ヴェドリーヌは、ポーヴォワールの『書簡集』、『戦中日記』に対して反駁書を出版している⁽⁴⁴⁾。だがそれ以前にポーヴォワールが、日記、そして第二の日記とも言える書簡の価値を信じきれなかつたようだ。ポーヴォワールは、日記に対してバルトと同じ気恥しさを示し、同じように日記を救おうと試みる⁽⁴⁵⁾。書いてゐる時点から読者を用意し、「毎日、正確に、疲れている時でなく

頭を休める時⁽⁴⁶⁾に」つけ、「偏執」となるまで続ける。しかし、より大きな作品の枠をはめ、それに合せて矯正しない限り、人目にさらす決心はつかない。日記のうさん臭さ、だらしのなさを容認するには、文学の価値、使命、秩序にかける信頼が強すぎる。「理想の日記⁽⁴⁷⁾」など、ポーヴォワールには矛盾語法としか映らなかつたにちがいない。

- (1) Simone de Beauvoir: *Lettres à Sartre*, I, II, Gallimard, 1990. (以下 *Lettres* と略) *Journal de guerre* (*septembre 1939 - janvier 1941*) Gallimard, 1990 (拙訳『ポーヴォワール戦中日記』人文書院、一九九三年、以下「日記」と略)
- (2) I、一九三九年九月一日～一〇月四日
II、一九三九年一〇月五日～十一月一四日
III、一九三九年十一月一四日～十二月二五日
IV、一九三九年十二月二六日～一九四〇年一月一九日
V、一九四〇年一月二〇日～二月二三日
VI、一九四〇年六月九日～七月一八日
VII、一九四〇年九月二〇日～一九四一年一月二九日
- (3) *L'invitée*, Gallimard, 1943
- (4) *La Force de l'âge*, Gallimard, 1960, p. 555 & 498 (以下、F. A. と略)
- (5) F. A. p. 560
- (6) 「招かれた女」を書き始めた頃から、グザヴィエール殺害がピエールの留守中に起きるつもりでいた。巡業とでもすればよい。戦争で、彼を遠くへやるのに願ってもない口実が得られた。男たちに見捨てられた町で二人の女が顔

- をつき合せていれば、平時よりも簡単に緊張の極限に達すると思ったのだ。」(F. A. p. 351-352)
- (7) Jean-Paul Sartre: *Lettres au Castor et à quelques autres*, Gallimard, 1983, II, p. 277 & 294
- (8) F. A. p. 28 『招かれた女』でボーヴォワールはフランソワーズに次のように言わせている。「私たちは一つだ、と彼女(フランソワーズ)は自分にくり返した、ピエールに言わない限り、どんな出来事も完全な事実とはならない。不動で、不確かなまま、いろいろな冥府をただようばかりだ。かつてピエールに気おくれを感じていた頃、こんなふうな横にのけておいたことが少なからずあった。いかがわしい考え、ふとした仕草といったことを。話さなければ、まるで初めから存在しなかったようだった。すると、それが本当の生活の下でひそかにいやらしい植物群をつくり、私はそこで一人きりに戻って、息がつまってくる。それから、少しずつすべてを打ちあけるようになった。もう孤独を知らないどころか、そうした混沌とうごめくものから自由になった。生活のどんな瞬間でも、ピエールに打ちあけると、澄んで、つやつやした、出来上ったものとして返ってくる。そして、私たち二人の人生の瞬間となる。彼女は、自分が彼に対して同じ役割を果たしているのを知っていた」(op. cit. p. 27)
- (9) オルガ(・コサキエヴィッツ、『日記』ではコス)、ヴェドリーヌ、ソロキーナはボーヴォワールの教え子、ポストはサルトルの教え子、ワングはオルガの妹。サルトルは当時ヴェドリーヌ、ワングと恋愛関係にあった。またボーヴォワールはオルガの恋人であるポストと恋愛関係、ソロキーナ、ヴェドリーヌとは同性愛関係にあった。
- (10) Maurice Blanchot: «Le journal intime et le récit», in *Le Livre à venir*, Folio-Essais, p. 252-259
- (11) *Le Deuxième Sexe*, Gallimard, 1949
- (12) F. A. p. 28
- (13) 「ヴェドリーヌは(……)手紙を通して本物のつながりをつくるかわりに、堂々巡りの物思いにふけり、ふるえ、泣く方を選んでいる」(『日記』三九年一月九日)「サルトルの軍隊生活を思うと、胸が破れます。でも私はプーベットとはちがいます。妹は好んでロヨラ流の瞑想をしていましたが、私はできるだけ考えないようにしています。」(Lettres, 1e 8 sep. 1939)
- (14) F. A. p. 105-106
- (15) *Quand prime le spirituel*, Gallimard, 1979. 一九三七年当時ボーヴォワールは *Primauté du spirituel* の題名で原稿を

出版社に持ち込んだが、どこも受け付けなかった。一九七九年、未刊行作品集の出版が企画され (*Les Ecrits de Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1979, par Claude Francis et Fernande Gonier) その際この習作は分量が多いので、改題して単独で出版された。

- (16) F. A. p. 231
 (17) F. A. p. 163-165
 (18) F. A. p. 230
 (19) op. cit. p. 101
 (20) F. A. p. 163-165
 (21) op. cit. p. 47
 (22) 『日記』一九九一年一〇月七日
 (23) Béatrice Didier: *Le Journal intime*, PUF, 1976 (邦訳『日記論』西川長夫、後平隆共訳、松籟社、一九八七年)
 (24) 『日記』一九九一年一月三日、二月九日
 (25) *Les Carnets de la Droïle de guerre*, Gallimard, 1983.
 (26) Michel Contat: *«Le continent Sartre»*, in *Magazine Littéraire*, n° 282, nov., 1990. (*Les Carnets de la Droïle de guerre* de Jean-Paul Sartre, effets d'écriture, effets de lecture), in *Littérature*, n° 80, déc., 1990.
 (27) 『日記』一九三九年九月五日、七日、一〇月七日、*Lettres*, le 8 sep. 1939
 (28) 『日記』一九三九年十二月二八日、*Lettres*, le 28 déc. 1939
 (29) 『日記』一九三九年一〇月七日、*Lettres*, le 7 et le 8 oct. 1939
 (30) F. A. p. 109
 (31) *Le Song des autres*, coll. Folio, p. 181
 (32) F. A. p. 229
 (33) 一九三九年九月一日～一月五日、四〇年六月九日～十三日、二八日～七月一四日の他、二月三日、八日、一九四〇年一月一〇日、二月一五日が日記の形になつてゐる (F. A. p. 390-472)

- (35) *La Force des choses*, Gallimard, 1963, p. 82-101, 412-474
- (36) *La Cérémonie des adieux suivi de Entretiens avec Jean-Paul Sartre*, août-septembre 1974, Gallimard, 1981
- (37) F. A. p. 390
- (38) F. A. p. 459-466
- (39) *Lettres au Castor et à quelques autres*, Gallimard, 1983
- (40) *Lettres*, p. 9
- (41) Deirdre Bair: *Simone de Beauvoir, a Biography*, Summit Books, 1990; traduction en français par M.-F. de Paloméra, *Simone de Beauvoir*, Fayard, 1991, p. 698-699
- (42) *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Gallimard, 1958
- (43) *La Force des choses*, p. 393
- (44) D. Bair, op. cit. p. 695
- (45) Bianca Lamblin: *Mémoires d'une jeune fille dérangée*, Balland, 1993
- (46) Roland Barthes: 《Délibération》, in *Le Bruissement de la langue, Essais critiques IV*, Le Seuil, 1984
- (47) 『日記』 三九キー一 田田田
R. Barthes, op. cit.

(フランス文学科 非常勤講師)